

# 解釈学的現象学における 他者了解について

本 田 弘 治\*

Von der Erfassung über den Anderen  
in der hermeneutischen Phänomenologie.

Koji HONDA

他者は否定し得ない仕方、かつ多様な様態において、私にさしせまってくる。我々は生きている限り、様々な人と関わりつづけている。我々がこのように他者と関わる事が出来るためには、何等かの意味で、他者を他者として了解していなければならない。それでは他者を了解するというのは、どの様な了解が為されているのだろうか。本論では「自分はいかにして他者と関わり合い得るのか。他者はいかに了解され得るのか」という事柄を、「解釈学的現象学における他者了解」という問題として考察してみたいと考える。

## I

ハイデッガーの解釈学的現象学でいう「現象」とは、このようなものとして現に開示されている<sup>1)</sup>「事象それ自身」、つまり現れている事柄それ自身の意味であり、その背後に何か実体というようなものを想定するものではない。

解釈学的現象学は、「現われているもの」・「開示されている事柄それ自身」を、そのものが示す通りに了解=解釈することを意味する<sup>2)</sup>。また解釈学ということの内には、了解が一挙に全て露なものとして与えられるのではなく、全体として開示された事柄を、了解しつつ解釈し、そのようなものとして、回帰的に了解へと仕上げるという循環が含まれている。

解釈学的現象学における、了解=解釈の出発点は、「何か前提されたもの」というような宙に浮いたところではなく、常に、既に、現に、このようなものとして開示されている有り方それ自身、言い替えれば「差し当たって大抵」という有り方であって、それがその根源へ向かって問い深められることになる<sup>3)</sup>。それでは一体何が、我々には開示されているのであろうか。

我々は自分自身を、現にこの様に存在している存在者——現存在——として見出しており、しかもこのような世界のもとに投げ出され、この様なものとして存在させられている存在者として見出している。また現存在は、他の事物の様に、ただ単に並列的、無世界的に存在しているのではなく、自己自身や他の存在者を、この様な世界のもとで見出し、了解することが出来る存在者である。言い替えれば、現存在は自己自身に閉じ込められてい

\* 本学非常勤講師（教養部）（平成元年9月30日受理）

るのではなく、何等かの意味で自己自身を越えだしている実存として、他の事物や他者と関わる事が出来る、つまり世界のもとの開けに、脱自的に有る存在者として開示されている。

この開けは現存在の構造として、空虚に開かれているのではない、ハイデッカーに準じて言えば、「先ず開けが有って、あとからそこへ何等かのものが入って来るというような宙に浮いた構造」ではない。現存在は、常に、既に、諸々の事物や他者と出会わされてしまっているという仕方、世界のもとの、開示されている事柄へと開かれているのである。ここで言われる、「或事柄が開示されている」ということと、「現存在が開かれている」ということとは別々の事柄ではなく、解釈学的状況それ自身を意味しているのである。

解釈学的状況をハイデッカーは、先見、先持、先把握された「『諸前提』の全体である<sup>4)</sup>」と言う。もちろんここで言う「諸前提」は、了解＝解釈するために、現存在が「前提」として想定したという意味ではなく、現存在にこの様な事柄として既に開示されてしまっているもの全体をさすのである。その開示されてしまっているものを、そのようなものとして保持し（先持）、眼差しを向け（先見）、統一的な全体として把握しつつ（先把握）この解釈学的状況において了解＝解釈がなされるのである<sup>5)</sup>。この開示されている事柄へと開かれているという、解釈学的状況に基づいて、現存在は、自己自身を見出すだけではなく、常に、既に、存在者や他の現存在を、何等かの意味で、開示されているもの<として>（als）了解していると規定し得るだろう。現存在は開けにおいて、開示されている或ものを、そのようなものとして了解している、言い替えれば、開示されている或ものへと、世界のもとの企投している存在者である。

## II

それでは他者は日常的に「差し当たって大抵」どの様に開示され、我々はそれをどのようにに了解しているのだろうか。例えば我々は他者を、

- <道を通りすぎる、自分とは無関係な人として>
- <近所の本屋の親切な御主人として>
- <私が愛している可愛い人として、或は私を愛してくれるやさしい人として>
- <共に協力し合っている信頼できる仲間として>
- <詩に歌われる勇敢でたくましい者として>
- <社会学における、だれでもよい一例として抽象化されたものとして>
- <医学や人間工学の対象として理解された、身体機能として>

などとして様々なに了解している。このような様々な他者了解は、いったい何に基づくのだろうか。

ここに挙げられたいくつかの例においても、現存在が他者をいかなるもの<として>了解しているのかというときの<として>ということに、多様な有り方を見ることが出来る。この<として>は現存在の態度に基づき<sup>6)</sup>、開示されている事柄それ自身を、その様なもの<として>了解＝解釈することを意味する<sup>7)</sup>。その際現存在は、確かに様々な態度を他者に対して取っている。しかし現存在は様々な態度を一挙に取ることは出来ない。現存在は、或特定の態度を取ることは出来ない、有限な存在者であり、或特定の態度のもとで、或ものをそのようなもの<として>了解＝解釈しているのである。

それではこの様に有限な現存在は、他者を真に了解＝解釈することが出来るのだろうか。解釈学的現象学における真なる了解とは、いかなることを意味するのだろうか。

有限な現存在は、他者を、伝統的な哲学の意味で、直接了解することは困難であった。もしその様なことを為し得るものが有るとするなら、それは無限なるものとしての神のみであろう<sup>8)</sup>。しかしこのことは、解釈学的現象学における現存在の了解=解釈の不可能性を意味するのであろうか。伝統的哲学において、了解は認識論の問題とされている。この立場に立つならば、認識はどこまでも他者と直接関わるものではないかもしれない。このことが伝統的な思惟において、他者了解を困難にするところでもあった<sup>9)</sup>。

しかしフッサールが基礎づけ、ハイデッガーが発展させ、自己の方法とした解釈学的現象学において、了解は、開示されている事柄それ自身——現象——と関わる現存在の存在構造を意味している。開示されている事柄と関わり、自己自身を越え出るとは、現存在それ自身が伝統的哲学で了解されていたような存在者として存在するのではなく、その様な存在を了解することが可能な存在論的存在者であり、現存在が考察されるためには、事物とは全く異なった、独自の、自己自身を越え出し、世界のもとでの開けに脱自的に有するという存在構造を現存在が持っていることが見透されていなければならなかったのである。それゆえ哲学は解釈学的現象学の出現によってはじめて、現存在を独自の存在構造を持つ存在者として了解することが可能になったと言っても良いであろう。<sup>10)</sup>

この解釈学的現象学において了解は、開示されている事柄と、存在論的な意味で、直接関わっている——開示されている事柄のもとへと自己を越え出し、関わっている——と言い得るであろう。もちろんここで直接と言われるのは、認識することが存在である絶対的認識(神の認識)の意味や、一挙に全てを露なものととして了解=解釈してしまうという意味ではない。そしてこのことは、現存在が開示されたものを、その様なもの<として>了解=解釈しなければならないことを意味しており、了解は、<として>という仕方では解釈仕上げられねばならない。

ここで<として>の意味が考察されねばならない。<として>には「Aを仮にBであるとして」という仮定や「そのようなものであると考えると」というような想定、「Aの代わりにBをAとして」という代理や、また代表、例示等の、対象それ自身を表さないことを意味する用法がある。またそれとは違って、開示されている事柄を——全てを露なものとして一挙に了解することは、有限なる現存在ゆえ出来ないが——事柄が開示されているその通りのもの<として>解釈しつつ、開示されている事柄の了解を深めるという意味が有り得るであろう。後者の意味での<として>は、開示されている事柄を勝手に解釈することや、それへ何かの意味を付与することではなく、事柄が開示されている通りに了解=解釈しつつ、開示されている事柄に真に近づくものと言えるのではないだろうか。またこれらことから、現存在の<~として>了解=解釈することには、開示された事柄に真に近づく場合だけでなく、仮定や想定等、多様な場合が有ることに留意しなければならないだろう。

それでは開示されている通りにそのようなものとして了解=解釈が為されている場合、他者はどのように了解=解釈されるのであろうか。この場合であっても現存在が、どのような態度で他者を了解=解釈しているのかという態度それ自身が、さらに多様で有り得るのではないだろうか。前述の例においても、

<無関心な態度で、他者を見過ごしている場合>

<日常的、平均的な態度で了解=解釈している場合>

<非日常的で感情的に高まった態度において了解=解釈している場合>

<学的で「客観的」な態度で了解=解釈している場合>等の態度が見られるであろう。

ここで<学的で「客観的」な態度>と言われる場合について考えてみると、社会学における、他者の存在の仕方と企投の仕方とを、平均化・一般化して考察する態度と、医学における、身体機能として抽象化して考察する態度とは明らかに異なった態度であるといわねばならない。それと同様、他の例のそれぞれの場合に多様な態度が有り得るのであるが、現存在はそれらの内で或特定の態度をとることしか出来ないのである。さらにまた例では簡単に<親切的な><信頼できる><やさしい>等と表現された了解=解釈の内容も、より深く解釈され得る多様な意味を含んでいるといわねばならない。

それでは、この様なものとして開示されている他者を、その様なものとして了解するとき、多様な了解を、現存在は多様なままで、個々別々のものとして保持しているのだろうか、それとも何等かの仕方、統一的なまとまりのもとで了解=解釈しているのだろうか。少なくとも他者了解の多様性を、現存在は、それら多様なものが、<開示されている他者>についての多様性である、ということを知っている。もしこの多様性が何の統一的なものをも持たないとしたら、それは他者了解の多様性であるという了解すら出来ないことになってしまう。いかなるものであるのかということ、覆い隠されているとしても、何等かの意味で、現存在は他者と共に存在しており、他者了解の統一性を保持していなければならない。この様な、他者と共に有るという有り方を、ハイデッガーは、共存在(Mitsein)という。それでは現存在は如何にして他者と共に有りつつ、統一性を保持して他者を了解しているのだろうか。このことを問い求めるためには、了解=解釈それ自身の構造が考察されねばならない。

### III

近世以来、了解=解釈は理性的主観が、開示されている事柄を対象として「客観的」論理的に理解することと考えられてきた。さらに理性的主観によって為される理解の内でも、科学的理解が最も確実なものと考えられていると言い得るであろう。前述の例においても社会学、医学、人間工学等では、現存在についての理解の「普遍妥当性」や「客観的確實性」が求められ、それらは確かに大きな成果をあげている。しかし逆にいえば「普遍妥当性」や「客観的確實性」を求めるといことは、かけがえのない、独自の、交換不可能な現存在を、交換可能な一例、あるいは統計的な数や確率、身体の構造や機能などとして扱い、それらを<冷静な態度>で考察するということにならざるを得ないであろう。このことは現存在が、各々の学によってそれぞれに規定され、現存在にとって、ときにはふさわしくない仕方理解されたり、他の事物と同様の存在者あるいはその機能として扱われ、また<冷静な態度>という特殊な——ある種の<情態性におけるエポケーが為された>とでも言い得るような<sup>11)</sup>——態度によって了解=解釈されているものといわねばならない。

現存在が理性的主体として理解され、事象を「客観的」な対象として理解し、科学を最も確実な学的思惟とする考え方が支配してきた状況において、事象はただ理性の対象としてのみ取り扱われていたと言い得るであろう。それでは現存在の了解=解釈は、この様な理性のみによって為され得るのであるだろうか。

前に述べたように、現存在が他者を了解=解釈するとき、<自分に無関係な人として><やさしい人として><身体的機能として>等のように多様な了解=解釈が可能であった。現存在が他者をこの様に多様な様態において了解=解釈し得るのであるならば、開示されている事柄を、その通りのものとして「顕ワナラシメル」ものも、多様な様態におい

て「顕ワナラシメル」ことを可能と為し得るものでなければならない。この「顕ワナラシメル」ものをハイデッガーはロゴスの意味として明らかにしている<sup>12)</sup>。伝統的な理性的主観の立場において理性・判断・概念・定義・関係等の意味と理解されていたロゴスを、ハイデッガーはその基盤を為している所にまで掘り下げ、開示されている事柄を「顕ワナラシメル」こととして明示したのである。また彼は、「理解」と等根源的に、現存在は「情態性」によって気分づけられていると主張する<sup>13)</sup>。このことは、伝統的に理性の事柄とされていた理解が、常に気分付けられているということであり、現存在は開示されている事柄を、その通りのものとして、ロゴスに基づいて、常に気分付けられつつ、理解しているということの意味している。現存在の了解＝解釈は、理解と情態性の統一されたものとして、ロゴスに基づいているときはじめて、多様な様態を、ロゴスに従っている多様なものとして、何等かの意味で統一し了解することが出来ると言い得るのではないだろうか<sup>14)</sup>。それではロゴス、理解、情態性とは如何なるものであろうか。

#### IV

伝統的に了解が理解として、理性的主観の問題とされ、感性は省みられることがあまりにも少なかったのであるが、ハイデッガーは現存在の了解＝解釈の構造に、情態性と気分という有り方を正当に位置づけようとしたのである。しかしハイデッガー自身の問いは存在へと向けられていたものであり、その問いの基礎となる、問いを問うことを可能と為している現存在が考察されたのである。彼にとっては現存在の情態性や気分を考察することが中心問題ではなく、それは現存在の存在構造を明らかにするための範囲で考察されたのである。それゆえ彼に、情態性や気分についての完備した考察を求めることはできないと言わねばならない。例えば彼は現存在の情態性を考察し、その根本的情態性を不安であると主張している<sup>15)</sup>。たしかに不安は現存在の根本的情態性と言い得るであろうが、さらに考えると、それは有限な現存在が、絶対的な安心——これは現存在が絶対的な存在であるということと同義であり、有限な現存在の構造とは相反するもの、現存在の存在構造を否定しているものである。それゆえ現存在の存在構造を基礎づけようとするハイデッガーにとって、考察すべき問題の範囲とはならないものである——という求め得ざるものを求めるが、絶対的な安心は、自己自身の有限性によって否定されている、言い替えれば、不安は現存在が絶対的で無限な存在であることを否定された存在であるということの意味している。それゆえ不安は何かに対するものではなく、現存在自身の有限性という有り方に基づくものであり、何もかに対しての恐怖とは区別されるのである。つまり絶対的な安心という、求め得ざるもの、絶対的不可能性の可能性が不安を明らかにしているのである。ハイデッガーは現存在の分析を、存在了解のための基礎的存在論に限定し、様々な変容の可能性は問うことを保留している。しかし現存在の情態性を含めた了解＝解釈が、考察の中心問題であったならば、このように現存在が自己の限界を越えたものをも求めている存在者であるということも考察されねばならないであろう。しかしハイデッガー以後、情態性や気分の考察において、彼以上に深い了解＝解釈がなされたとは言い難いだろう。

事物が考察されるときや、他者が単なる存在者に類したものと考えられたり、一般化・抽象化されて考察されるとき、情態性は考慮されなかったか、或は周辺の問題としか考えられていなかった。了解＝解釈からいえば、たとえ単なる存在者を了解＝解釈する場合といえども、了解＝解釈は常に情態性を含んでいるといわねばならない。しかし伝統的な思惟においては、真面目に「客観的」で「正確」な理解をしようとするのならば、情態性な

どというようなものにとらわれてはいけなと考えられたり、よけいな周辺の問題とされ  
て来たのではないだろうか。

確かに事物が理解される時や、他者が事物に類したものととして抽象化されて了解＝解  
釈されたりしている場合、「客観的」で「正確」な理解を求めるのに情態性は問題となら  
なかったのかもしれない。しかし他者了解は、単なる存在者についての了解ではなく、他  
者自身が、了解＝解釈し気分づけられつつ企投しているという、特別な構造を保持して  
いる、他の現存在として開示されているのであり、それにふさわしい了解＝解釈が為されね  
ばならない。また他者にふさわしい了解＝解釈が為されるためには、現存在自身の多様な  
了解＝解釈の可能性のもとで、他者の企投の多様性は、ロゴスに基づいた統一的なもの  
として保持されねばならない。それでは他者の企投を、我々はどの様にロゴスに基づいて、  
理解と情態性において了解＝解釈しているのであろうか。

## V

我々に開示されている他者の企投、それは単に他者の身体的な行動だけではなく、他者  
自身によって了解＝解釈されたものが、様々に表現されたものでもあり得る。

例えば首を上下する身体的行動に出会った我々は、何を了解＝解釈するのだろうか。身  
体機能として可能な動きと理解されることもあるだろうし、肯定の意味と了解されること  
もあるだろう。あるいはやさしいしぐさとして解釈されることもあるだろう。

また他者によって了解＝解釈され、その了解＝解釈されたものが表現された場合、我々  
はその表現されたものをどの様に了解＝解釈するのだろうか。それは<冷静な態度>で論  
理的に表現されている、医学における新学説と了解されるものである場合もあるだろうし、  
芸術表現として了解＝解釈されるものである場合もあるだろう。他者了解はこのような他  
者の様々な企投を、様々な態度において了解＝解釈しつつ、何等かの統一的なものへと仕  
上げられていなければならない。

これらの他者の企投を我々は、先に考察されたように<冷静な態度>による表現を<冷  
静な態度>で理解する、特殊で抽象的な、それゆえ他者了解としてはふさわしくない —  
しかしやはり確実な他者了解の様態と了解されねばならない — 場合をも含めて、情態  
性によって気分づけられつつ了解＝解釈していると言い得た。

ハイデッガーは、論理的理解によって、開示されている事柄を明らかにすることには限  
界があることから、より根源的な了解＝解釈の仕方を求めた。彼は後期になって、真の了  
解＝解釈<sup>16)</sup>を詩作の中に見い出そうとしている。詩作によって為される了解＝解釈とその  
表現(詩)は、単に論理的に理解されただけのものではなく、ときには論理的理解や言語  
規則を越え出たものでありながら、詩作者の了解＝解釈によって得られた、真なるものを  
表現している。我々がその表現されたものを了解＝解釈し得るということは、論理的理解  
や言語規則を越え出ている、なお深く感得し得るものが保持されていると言わざるを得  
ない。

伝統的に感性は思惟に素材を提供するもの、理解より下位のものとされ、ここでいわれ  
る、感得されたものや、情態性、気分等の事柄について充分な考察が為されてはいなかつ  
たといってもよいであろう。しかしハイデッガーが注目した詩や、或は他の芸術表現で  
「高度の精神性」等といわれているものは、深い感得によって了解＝解釈されたものの表  
現と言い得るであろう。この深い感得による了解＝解釈を得るためには、理解が思惟に耐  
えねばならないのと同様に、開示された事柄を、その通りに受け取り、その意味を「顕ワ

ナラシメ」、感得しつつロゴスに基づいて「沈潜する」とでも表現されることに耐えねばならないであろう。感得されるものは、一挙に為されるのではなく、いわば感得しつつ沈潜に耐え抜き感得を仕上げることによって、より深いものとして形成されるといわねばならない。しかし、伝統的な思惟において、情態性や気分、感得と沈潜によるその形成等の事柄は十分に考察されていなかったため、この様な了解=解釈を意味する言葉は、いまだ充分とは言い難いものであり、我々はこの不十分な言葉を新たに形成することを含めて、感得しつつ了解=解釈を深めて行くこと、つまり沈潜に努めねばならない。

この感得と理解は別々のものではなく、等根源的にロゴスに基づき、了解=解釈を形成しているのであり、本論で他者了解のさし当てる例とされたものにおいても、了解=解釈が常に気分づけられているということを感じ得ることによって、開示されている事柄をより深く了解=解釈し得るのではないだろうか。沈潜しつつ感得することは、ロゴスに基づいた了解=解釈を、理解と等根源的に形成しているのであり、沈潜しつつ感得するという側面が了解=解釈に欠落していたり、正当に位置づけられていなかったならば、「顕ワナラシメル」ロゴスにふさわしい——また現存在にふさわしい——統一的な了解=解釈は得られないであろう。他者は我々に、現に開示されているのであり、我々は開示されている他者を、ロゴスに従って、開示されている通りに思惟と沈潜に耐え、了解=解釈を深めねばならない。

本論の目的は、事物的存在者とは全く異なった、独自の存在構造を持つ他者、他の現存在の了解=解釈を考察することであった。そのとき同時に現存在の了解=解釈が、伝統的な理解の仕方では他者を了解するのに不十分なことが考察された<sup>17)</sup>。また本論で扱われた他者了解は、他者が企投してしまったもの、既在のものが中心であった。それでは他者が、企投しようとしてつつあるもの、すなわち現在と将来を含んだ他者の了解は出来るのだろうか。レヴィナスは他者の考察において、他者と、他なることとを同一のものとして扱っている。彼によると、他なることとは自己ならざることであり、それは自己の了解し得ざることとして、了解不可能なことを意味しているという。さらに彼は、未来こそ他なること（他者）(l'autre) の内で最も他なることと考へ、了解し得ないものと規定している<sup>18)</sup>。しかし、レヴィナスとは異なって、他なること (das Andere) と他者 (der Andere) との差異を認めるならば、事態は変わってくるのではないだろうか。さし当たっての例で見られた、<共に協力し合っている、信頼できる仲間>との関わりは、現に我々に開示されているのであり、<共に協力する>ことは、何ものかに対して、他者と共に将来を予期しつつ企投しているということがなければ成立しないであろう。

いま我々は他者了解という問題の入口に、なんとかさしかかった所といってよいであろうか。今後も忍耐強く了解=解釈に努め、他者了解を少しでも明らかなものとしていきたい。

#### 注

- 1) ここで言われる「開示されている」という用語は“Sein und Zeit”での現象の規定「自己自身を示す」よりも、被投の意味が強調されていることに留意されたい。Vgl. M. Heidegger: “Sein und Zeit” 11. Aufl., Tübingen 1968, S. 27ff. 以後 SuZ と略記。
- 2) Vgl. SuZ, S. 27ff.
- 3) 注2)に加えて、解釈学的現象学と了解とに関しては、『哲学』14号(関西大学哲学会)中の拙論「ハイデッガーにおける被投的企投としての了解」を参照されたい。以後『了解』と略記。

- 4) SuZ, S. 232.
- 5) この先=構造については『了解』を参照されたい。
- 6) これは日常的現存在の有り方での<として>である。
- 7) Vgl. SuZ, S. 149.
- 8) フィンクは神にあらざる現存在の了解=解釈を神秘であると言うが、全てが露に了解=解釈しつくされるのではなく、Geheimnisとして、常に了解=解釈がその途上にあるということであり、神秘とは言えない。  
Vgl. Eugen Fink: "Grundphänomene des menschlichen Daseins", Freiburg, München, 1979, S. 88.
- 9) 伝統的哲学に関しては、ハイデッガーの「存在論の歴史の破壊という課題」であり、彼のデカルトやカント批判を参照されたい。  
Vgl. SuZ, S. 24.
- 10) このことはハイデッガーが主張する存在忘却と直接結び付く問題である。伝統的哲学においては、存在者の存在が忘れ去られ、存在者の存在意味を理解することが出来る現存在をも含めた、あらゆる存在者が、単なる存在者として了解されているのである。それゆえ伝統的哲学では存在を了解し得る存在論的存在者である現存在にふさわしい了解=解釈はなされ得ないのである。なお、解釈学が存在論であることについては、『関西哲学会紀要 第二十二冊』中の抽論「ハイデッガーにおける解釈学について」を参照されたい。
- 11) たとえ考察する人の気分がどの様なものであれ「研究考察の仕事に関わる時は<冷静な態度>で為さねばならない」と言うことは、現存在が開示されている通りの気分づけられたあり方を保留し、「」に入れると言う操作が為されており、一種の情態性におけるエポケーと言い得るのではないだろうか。もちろんこれも、態度をとらないということではなく、一つの態度といわねばならない。
- 12) SuZ, S. 32, ログスについて詳しくは『了解』を参照されたい。特に「沈黙の語り」を聞くということが、後述の「沈潜」を可能とするものである。
- 13) Vgl. SuZ, S. 133ff.
- 14) この<冷静な態度>も含めて、現存在の様々な態度と、死を覚悟した本来的な現存在の態度との関係は、今後の課題としたい。
- 15) Vgl. SuZ, S. 182.
- 16) もっとも彼は解釈学的現象学の意味での、この言葉をもはや使っていない。
- 17) 伝統的な意味における理解では、他者了解についてだけが不十分であるのではなく、実際には事物の了解においても一面的であるのだが、そのことが明らかな問題にならなっただけである。
- 18) これはフランス語に単数中性名詞がなく、他者は複数で他の人々としか表現できないことも影響しているのではないだろうか。少なくともレヴィナスは、他者と他なることを同一の言葉の内、任意にずらしていると考えられる。

参照、エマニュエル・レヴィナス『時間と他者』原田佳彦 訳（法政大学出版局）81頁

#### Auszug

Der Zweck dieses Versuchs ist es, die Struktur von Erfassung = Auslegung des Daseins über den Anderen zu betrachten. Der Andere hat eine eigentümliche Seinsart, die sich ganz von einem vorhadenen Seienden unterscheidet. In dieser Betrachtung finden wir, daß es in der traditionelle Verstehensweise nicht genug



ist, den Anderen zu erfassen. In der traditionelle Verstehensweise ist die uns gezeigte Sache nur von einer Seite zu erfassen, weil dort die Befindlichkeit oder die Stimmung fehlt. Wir machen Erfassung = Auslegung in der Vereinigung von Verstehen und Erfüllung. Wir müssen auch die uns gezeigte Sache vertiefen, um sie zu erfüllen, wie wir sie denken müssen, damit wir sie verstehen.